

編集後記

■編集委員

委員長

藤田郁代

副委員長

立石雅子

今井智子

内田信也

宇野彰

勝木準

倉内紀子

倉知雅子

佐藤睦子

城間将江

鈴木恵子

関啓子

玉井ふみ

長谷川賢一

春原則子

深浦順一

藤原百合子

水田秀子

矢守麻奈

木々の緑が濃さを増し、雨天の日が多くなりますと、日本言語聴覚学会の開催が近づいたことを実感します。今年は第18回学会が6月23・24日に松江市で開催される予定であり、多数の研究成果が発表されることと思います。

学会発表は研究報告過程の通過点であり、最終的な報告は査読がある学術誌に投稿し、論文が掲載されることをもって完了します。言語聴覚研究はそのような役割を担う学術誌のひとつです。学会発表にとどまらないで論文発表をすることが重要な理由はいくつかありますが、そのひとつは研究成果を広く共有し、他の研究者が追試をして客観性を高める、または他の研究者がそれを踏まえてさらに研究を発展させることを可能にすることにあります。研究の成果を臨床に還元するには、複数の研究者や臨床家が共同してその有用性や効果を客観的に示すことが必要ですが、このような態勢を整えるうえでもその研究が再現できるよう論文によって詳細に報告しておくことが重要です。

今号には、倉知雅子氏の総説「嚥下造影(VF)画像解析：異常所見の奥を見る眼と知の融合」、失語症の名詞・動詞の発話への Cue 効果(岩田晃典氏)、キーワード法を使用した仮名書字訓練(橋本幸成氏)、パーキンソン病における表情認知の問題(福井恵子氏)、Down 症児の摂食機能(中村達也氏)、低酸素脳症の視覚探索障害に対するリハビリテーション(大森史隆氏)に関する原著論文、短報2編が掲載されています。

現在、医療界では evidence based medicine (EBM) が成熟し、各学会が診療ガイドラインを作成し臨床に活用しています。言語聴覚臨床においても evidence based practice (EBP) が浸透し、ASHA (米国言語聴覚協会) ではエビデンスを臨床に活用するシステム作りが進んでいます。EBP を実践するには、ハードの構築とともにソフトの充実が重要です。それにはよくコントロールされた研究の積み重ねが必要であり、今号に掲載された研究はその期待に応えるものと思います。

(藤田郁代)

言語聴覚研究 (第14巻 第2号) 2017年6月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：一般社団法人 日本言語聴覚士協会 (会長：深浦順一)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 6-29 アクロポリス東京 9 階

(☎ 03-6280-7628 FAX 03-6280-7629) <http://www.jaslht.or.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Acropolis Tokyo 9F, 6-29 Shinogawamachi, Shinjuku-ku, Tokyo, 162-0814, Japan

©2017, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院 (代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23 (振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎ 03-3817-5659・5660 (FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎ 011-241-9341 (FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)文京メディカル ☎ 03-3817-8036 (FAX 03-3817-8044)